4. モラエス七回忌法要の背景 ― 顕彰、観光への期待、『日本精神』刊行の意味するもの ―

佐藤 征弥

1. はじめに

ヴェンセスラウ・デ・モラエス（Wenceslau de Moraes）は、1854 年ポルトガルのリスボンで生まれ、海軍士官となると、アフリカやマカオでの勤務に就くかたわら文筆活動を行なった。1897（明治 30）年に神戸に移り住み、外交官に転身した。ポルトガル領事を 1913（大正 2）年まで務めたが、おヨネの死を契機に職を辞し、徳島に隠棲して執筆活動に専念し、亡くなる 1929（昭和４）年まで日本を題材にした作品を祖国ポルトガルに発表し続けた。しかし、生前、彼の作品が邦訳されることはなく、また晩年に彼を新聞や雑誌に紹介し、世に知らしめようとする人々も現れたが、モラエスは自分が有名になることを嫌ったため、作家として知られることはなく、ごく親しい者を除くと、徳島の人々は彼を風変わりな外国人としてみていた。

1929（昭和 4）年 7 月 1 日、彼は自宅で死亡しているのが発見された。告別式にポルトガル側から代理公使、神戸領事、横浜副領事がかけつけると、徳島の人々はようやくモラエスがポルトガルでは著名人であることを知った。告別式には徳島側から数人の知人のほか、知事、市長代理、助役、警察署長、光慶図書館長らが参列した[1, 2]。しかし、三回忌からは近所に住んでいてモラエスの葬儀の世話をした前田正一を中心とした親しかった数名で命日に法要が行われていた。

ところが、1935（昭和 10）年の七回忌に法要は突如大きな盛り上がりを見せた。モラエスの本格的な顕彰活動はこの時に始まったといえる。七回忌を盛大に営むことを発案したのは、学務部長として徳島県に赴任してきた湯本二郎である。政府を動かし盛大な法要になったのは、彼の圧倒的な情熱によるところが大きい。湯本の功績や法要の様子についてはモラエスの翻訳者であり研究家である岡村の論文や著書に詳しい[1, 3]。日本政府にとっても法要を後援し、モラエス顕彰を推し進める理由があった。岡村は次のように分析する。

> これより 4 年前満州事変が勃発し、続いて五・一五事件を経て日本は長い十五年戦争に突入していた。国内では国防外国熱が高まる一方、国際的には国連を脱退して国際社会から孤立し、戦時国家体制の確立にふみだしはじめていた。机上に額におさめた明治天皇の写真を飾り、日本人と同じ日常生活を営み、日本紹介の書を多数著わした外国人の存在は、政府にとってナショナリズム宣揚のうってつけの材料である。このような時代背景であればこそ、湯本の運動が奏功したのであった。[3]

本研究は、このような時代的背景から七回忌をとらえる視点での分析にさらに踏み込み、七回忌法要に重要な役割を果たした人物の背景や思想を紹介し、七回忌法要に対する彼らの思惑を考察する。特に徳島出身で外務省情報部長であった天羽英児や、これまでのモラエス研究で取り上げられることのなかった日本文化連盟会長で内務省警保局長を務めたことのある松本学が法要の計画時から携わり、文芸を通じて国際社会に日本精神を伝えることで国威発揚を目論み、大々的な法要を通じて国内外にモラエスをアピールすることを企図したことを指摘する。また、徳島側にとっては、モラエス顕彰は国内外に徳島を紹介する材料としたいという期待があり、天羽や光景図書館長坂本章三がその橋渡し役を担ったことを指摘する。さらに彼らをとりまく人物や関係団体に触れながら、七回忌法要の目的とその後のモラエス顕彰に与えた影響について述べていく。

2. 七回忌法要

2-1. 法要の概要

モラエスの七回忌法要は、死亡した 6 年後の命日 1935（昭和 10）年 7 月 1 日に、徳島公園内の千秋閣で営まれた。翌 7 月 2 日の徳島日日新報の記事から法要の概要を抜粋する。

> 日本を愛し徳島を懐かしんで遂に本市に終焉した葡萄牙文豪故ヴェンセスラオ・デ・モラエス翁逝いて七年翁が日本在住四十年間に遺した日本精神の紹介日葡親善に貢献した偉大な文筆の功績は遂に顕れ、徳島縣民の追慕と、日本全國民の熱烈な感謝をこめた翁の業績を顕彰する意味の下にモラエス翁七周忌追悼大法會は全世界の注視を集めけふ七月一日午前九時二十分より徳島公園千秋閣において縣外からは特にリベロ・デ・メロ駐日葡國公使、スーザー同神戸領事、外務省から帰朝中の笠間駐葡公使を始め國際文化振興會代表團男爵、松本日本文化聯盟代表、文部大臣代理松尾成人課長、星東京外語教授、福良在阪縣人會長、本縣出身文士新居格、花野富蔵兩氏の外佐藤春夫氏、外務省アメリカ局會田慶佐氏、蜂須賀家代理同豊隆氏、日葡協會代表等約二百名本縣においては諸官公衙長縣市會議員、町村長、中小學校長、一般有志等約一千名を招待してモラエス翁顕彰會徳島縣市主催の下に佛式で盛大に執り行はれた

法要を主催したのは、このために組織されたモラエス翁顕彰会で、戸塚九一郎徳島県知事が会長となり、藤岡直平衛徳島市長と湯本二郎学務部長の二名が副会長を務めた。法要の参列者は県外から招待した 200 名の賓客や、県内から要職に就いている者や有志らを合わせて約千名という大変な数にのぼった。

同記事では、式の模様を次のように伝えている。

數發の煙火を合圖に定刻九時廿分法會場千秋閣大廣間に來賓顯彰會員係員全部着席中央には故モ翁の日本戒名『藻光院扁窓文献大居士』の文字を刻した位牌を祭り肖像を掲げ數段の祭壇には各方面から贈られた百に餘る菓子果物を供え兩側には外務、文部、拓務、鐵道各大臣、近衛公、蜂須賀正氏候、在阪縣人會ロータリー等より花輪が所狭きまでに並べられ翁の功績を偲ぶに充分である斯くて顯彰會副會長湯本縣學務部長の挨拶があり高野山管長代理縣佛教會長中村豫諦師導師、安住寺住職淺川律圓師及びモ翁菩提寺潮音寺住職を始め十八ヶ寺住職の手により入堂、偈、前讃五悔の法要がしめやかに進められ會長戸塚知事の別項の如き式辭に次いでメロ葡國公使、外務、文部、鐵道、拓務各大臣、蜂須賀家、天羽外務省情報部長、日葡協會、國際文化振興會各代表者及藤岡市長のモ翁追悼文を朗讀、續いて讀經後、焼香に移り戸塚知事メロ公使各大臣代理者、蜂須賀豊隆氏、松本學氏、團男爵、遺族總代表齋藤ユキ代立花マルエ氏（小春の妹）一般有志の順にて焼香あり後讃回向文の後副會長藤岡徳島市長の挨拶をもって追悼法會はしめやかの裡にも嚴粛に賑やかに十一時終了した

記事には、花輪を送ったり追悼文を寄せた者（組織）や焼香を行った者の名前が挙げられており、これらの人物・組織について後で述べる。

午前の法要に続いて、午後に行われた記念講演会についても同じく 7 月 2 日の徳島日日新報から紹介する。

故モラエス翁七週忌記念大講演會は一日午後一時五十分より徳島公園千秋閣に開かれた此日そぼ降る梅雨の中をモラエス翁を知らんとする熱心な聴衆は定刻迄に詰めかけ殆ど場を埋むるばかり湯本縣學務部長の挨拶ありて始まり先ず神戸駐在葡國領事シルビー・スーザー氏は拍手に迎へられて登壇し流暢なる英語でモ翁を語り湯本學務部長は其譯文を朗讀し次で文士佐藤春夫氏其他

葡萄牙駐在公使	笠間　杲雄氏
東京外國語學校教授	星　　眞（註：正しくは「誠」）氏
外務省亜米利加局	會田　慶佐氏
日本文化聯盟會長	貴族院議員　　松本　學氏
日本文化聯盟	石川　通司氏
國際文化振興會理事	男爵　　團　伊能
文士	新居　格氏
文藝懇話會	佐藤　春夫氏
文士	花野　富藏氏

交々登壇して眞に日本を理解し之を海外に紹介した文豪モ翁の功績を稱へて故人を偲びモ翁と徳島との深い關係等を説ひて感銘を與へ意義深きものあり三時散した

このように法要や講演会には多くの者が参加したが、その中から、モラエスの縁故者は別として七回忌に深く関わった人物および組織について以下に紹介し、どのような目的で参加したのか以下に考察する。

2-2. 湯本二郎について

前述のように七回忌を盛大に催すことを企画したのは学務部長の湯本二郎であり、法要や講演会も取り仕切った。佃實夫は『わがモラエス伝』[4] の中で湯本について次のように記している。

> モラエス歿後二、三年して、長崎県から徳島県へ転任して来た湯本二郎という学務部長があった。長崎でシーボルトの顕彰に功があった人で、徳島へきてモラエスのことを知るや、さっそく力をいれて顕彰事業の計画をたてた。

佃は、湯本がモラエスが無くなった二、三年後に長崎から徳島に赴任してきたように書いているがそれは間違いである。湯本が長崎にいたのは確かだが、徳島に来る前は、岩手県の学務部長を務めていた。『地方庁高等官一覧表』によると、1934（昭和 9）年 9 月 5 日には岩手県の学務部長であったが、1935（昭和 10）年 2 月 8 日では、徳島県の学務部長になっている。時期についてもモラエスの死後 2、3 年ではなく七回忌を迎える年であった。その数ヶ月後には国を巻き込んで七回忌を盛大に挙行するに至ったわけで、猛烈な行動力と言わざるをえない。

湯本が学務部長になったのは、徳島の前の赴任地である岩手県であったが、赴任後まもなくの 1933（昭和 8）年 3 月 3 日に発生した昭和三陸地震とその津波により岩手県は大被害を受け、彼はその対応に忙殺された。彼は徳島に赴任して光慶図書館でモラエスの作品や遺品を目にして心打たれ [5]、想像だが、モラエス顕彰が退官前の最後を飾る仕事であると決意して全精力をつぎこんだものだろう。後に、モラエス廿四回忌の席上において開かれた座談会において、出席者の一人が湯本について「当時の学務部長に湯本というガムシャラな人がいてね、大変な力の入れ方で、このモラエス翁顕彰会も出来たのだ、いま何処にいるのかね、湯本氏、あれた大した男だったよ」と述べている [6]。

2-3. 拓務省、鉄道省の関与

法要において花輪と追悼文の贈り主のリストに外務大臣、文部大臣、拓務大臣、鉄道大臣が含まれており、政府の力の入れようがわかる。外務省と文部省が関わっていることは不思議ではないが、拓務省と鉄道省がなぜモラエスの法要に関わっているのかについては説明が必要であろう。まず拓務省との関係は、国策としてブラジル移住推進にモラエスを利用しよう意図があったと考えられる。モラエスは、生前から新聞や雑誌においてブラジルと絡めた紹介のされかたをしているが、その先駆けとなったのが法要にも参列した外務省の会田慶佐である [7]。会田は、ブラジル赴任中に、モラエスの作品がブラジルにおいても

読まれていることを知り、サンパウロの新聞に彼について紹介した。帰国後、モラエスと書簡を交わし、1927（昭和 2）年 7 月に雑誌『ブラジル』に飯塚春夫というペンネームで「我が國をブラジルに良く紹介し得るたゞ一人の葡國人 モラーエス氏と日本」という記事を発表した[8]。拓務省はモラエスが亡くなったとの同じ年の 1929（昭和 4）年に南米・南洋への移植民事業を主管する目的で設けられた省で、1932（昭和 7）年になると、ブラジル行き移植民を対象に支度金の支給を始め、ブラジルへ移住する機会は広がっていった[9]。後で述べるように法要の準備のために外務省で開かれた会議において、拓務省は積極的に参加する旨外務省に伝えている。

次に鉄道省との関係であるが、これは鉄道省の下部組織である国際観光局がモラエスを利用しようという意図があったと考えられる。国際観光局は「経済的困窮の打開策、国際親善の有力手段の一方策として外客誘致の重要性が認識されつつある中、1929（昭和 4）年には貴衆両院から外客誘致に関する調査・実行を図る中央機関を設置すべしという建議書が提出され、1930（昭和 5）年に「外客誘致に関する施設の統一連絡及促進を図る官設の中央機関」として設立された[10]。7 月 1 日の徳島毎日新聞には「再び徳島に寄せる−國際觀光の角度−」という新居格の文章が載っており、法要の計画をたてるために 5 月 12 日に外務省で開かれた会議に国際観光局から局長と事業課長が参加したことを伝え、さらに「モラエスの徳島を國際觀光の筋道に新に組みいれやうとして下さるからお意思ではないかと、わたくしは推測したのでした。さうなると、これから徳島の名も國際觀光の看點からも廣く海外に知られることゝもなり外人にして徳島を訪れるものも非常に殖へるやうにならにとも限らないのです。」と記している。

2-4. 国際文化振興会

法要には国際文化振興会から常務理事の團伊能が参加して追悼文を披露し、その後で開かれた記念講演会で講演を行なった。国際文化振興会は、1931（昭和 6）年に始まった満州事変や 1933（昭和 8）年に国際連盟を脱退したことにより悪化した日本のイメージを回復するため海外に日本の芸術文化を積極的に紹介することを目的として 1934（昭和 9）年に設立された外務省の外郭団体である。海外向けに映画や写真の製作、出版、海外博覧会への参加などの活動を行った。この時の法要の様子も撮影され、ポルトガル政府に贈られた[1,3]。国際文化振興会が発足したのは法要の前年であり、会の仕事として格好の場となったと思われる。同会が英文で発行した事業報告書に、徳島での七回忌法要と 7 月 12 日に東京で催された遺品陳列会と追悼後援会のことが紹介されている[11]。法要に参列した團伊能は東京帝国大学で美術史を講じ、1933（昭和 8）年 5 月同職を退官し、国際文化振興会に入り常務理事となった。モラエスに対して特に関心が高かったわけではないが、法要の前夜に新聞記者のインタビューにモラエスの美術収集を見たいと答えている。

2-5. 星誠、會田慶佐、日葡協会

東京外国語学校教授星誠と外務省亜米利加局の会田慶佐は、法要で焼香し記念講演会で講演を行なったが、二人は東京外国語大学葡萄牙語学科の卒業生である。会田については、生前のモラエスと交流があったことを先に述べたが、七回忌の前年の 1934（昭和 9）年 6 月 22 日から徳島毎日新聞に"O "Bon-odori,, em Tokushima"（邦題『徳島の盆踊』）の翻訳を連載した。これは湯本の企画した七回忌法要とは無関係に会田が自発的に行なった仕事で、法要当日 7 月 1 日の徳島日日新報に掲載された「モラエスの追憶」という寄稿の中で「モラエスの事跡を内外に顕彰したいと言うのは僕の年來の念願であった。一昨年の夏一週間餘を此の徳島縣に於て事跡調査の爲に過ごしたのも其の準備のためであった。」と記している。

法要に参列し追悼文を朗読した中に日葡協会からの参加者がいた。あいにくこの人物を特定する資料がないが、1925（大正 14）年 12 月に創立したこの協会の主事を務めたのが同じく東京外国語大学葡萄牙語学科の卒業生岡本良知である。岡本も会田と同じく、生前のモラエスを東京日日新聞や雑誌『書誌』に紹介した[12, 13]。同学科の出身者が、何人もモラエスと繋がりをもつようになった背景には、葡萄牙語学科ができたばかりで、彼らが最初の卒業生であったことが挙げられる。彼らの学生時代、ポルトガル人教師ピント教授からモラエスのことを聞いた学友の安部六郎と上野忠夫がモラエス宅を訪れたことがあり、モラエスのことは学生らに知れ渡っていた[1, 3]。そしてモラエスを有名することは、同学科が社会に貢献する一つの手段となった。

なお、この時の日葡協会は、現在の日本ポルトガル協会とはまったくの別組織である。

2-6. 松本学と日本精神

日本文化連盟から会長の松本学と石川通司が法要に参列し、記念講演会で講演を行なった。松本は、モラエスと交流があったわけではないが、七回忌が政治思想的な意味を持つことになった背景には、彼の存在が極めて大きい。松本はこの時貴族院議員であったが、もともと官僚出身であり、知事や社会局長を務めた後、1932（昭和 7 ）年に全国の警察組織を統括し、その活動を指揮・監督する立場にある内務省警保局長に就任すると、日本共産党に対する大規模な弾圧を実施した。また、警保局長在任中の 1933（昭和 8）年 7 月に日本文化連盟を結成し、翌年の 3 月には多くの作家を巻き込んで文芸懇話会を設立するなど国家主義的な文化運動を推進した。

松本は法要に参加するきっかけについて、7月1日の徳島毎日新聞のインタビュー記事の中で次のように語っている。

> 私はモラエス翁は知らなかったが花野富藏氏からモラエス氏の事を聞いて始めて知ったのであるがモ翁の日本精神が哲学的に深みのあるもの又は小泉八雲に比してどちらが深みがある等は問題ではない要は翁が日本をよく理解して呉れてゐた事に感謝するのであるポルトガルでは魂の抜けた西洋人と翁の事を言ってゐる　今度邦人主義運動のついでに七周忌に參列したいと思って來た譯である

（下線は筆者による）

松本が口にした「日本精神」は、彼の思想の根幹をなすキーワードである。彼が局長を務めていた時期の 1933（昭和 8）年 5 月 8 日に警保局が配布した「思想問題対策案」には、「建国精神（日本精神）ノ確立ト精神運動ノ作興」が必要であり、「建国精神（日本精神）ヲ総ユル社会層ニ普及徹底セシムル為官民協力シテ国民精神ノ作興ニ努ムルコト」と記されている [14, 15]。くしくも法要に合わせて花野富蔵が翻訳した『日本精神』[16]が出版されたわけだが、松本の談話によれば花野からモラエスのことを知らされ、当然モラエスの『日本精神』の内容も知らなかった。花野の方から松本に近づいたわけだが、では花野は松本の思想に共鳴していたのだろうか。『日本精神』の原著タイトルは、“Relance da Alma Japoneza”であり、直訳すれば「日本の魂の瞥見」となる。これを『日本精神』とした理由について、花野は法要に合わせて開かれた徳島毎日新聞主催の「モ翁を偲ぶ座談会」において次のように語っている。

> 私が『日本精神』を譯した時の感想としては、彼れは論文でもなければ四角張ったものでもないので、元々『日本精神』と云ふ題よりも『日本の精神』或は『日本の魂』と云ふ題を附くべきでありましたが、そんな名前のものが小泉八雲のものにあり、又モラエスさんの思想と小泉八雲の思想とが全くに接近してゐますので同じ名前とする事が自分の意に充たなかったので態と『日本精神』と云ふ題を附けて近代味を盛った積りであります。或はさっき坂本さんから配附された目錄の様に・・・・・・小泉八雲の著作と同様『日本の魂』と云ふ題を附けたが良いかどうかと云ふ事は大方の御批判を仰ぎたいと存じます
> （下線は筆者による）

「近代味を盛った」というのは、創立して間もない日本文化連盟や文芸懇話会が盛んに提唱する「日本精神」や「日本主義」といった言葉を意識したもので、流行に乗ったと解釈してよいだろう。

松本は、日本のよき紹介者であるモラエスを評価したが、文系懇話会からの代表として参列し、講演を行なった佐藤春夫は、松本と違う観点からモラエスを評価した。佐藤は松本に誘われて法要に参加したが、モラエスに対する考え方はまったく異なり、詩人モラエスをアピールした。佐藤は 7 月 1 日付の徳島毎日新聞に「モラエスの未刊詩」という寄稿において、モラエスの詩人としての資質を高く評価し、「日本主義者モラエス發見に急の餘り彼の第一の美點たる大詩人モラエスを忘れるに忍びない」と日本主義にちくりと釘をさしている。佐藤はさらに法要の後すぐに大阪朝日新聞に連載した「徳島見聞記」の中で、モラエスを「情痴の詩人」と称した。非常にインパクトのあるこのモラエス評は、後々までモラエスをよく知らない人々のモラエスに対する印象に影響を及ぼすことになった。

2-7. 天羽英児、花野富蔵と徳島中学出身者

七回忌法要において徳島と政府のパイプ役を担った天羽英二は、旧制徳島中学の出身で、外務省に入省すると朝鮮、オーストラリア、イギリス、スイス、中国、ソ連に勤務し、1933（昭和８）年に外務省情報部長となった。ポルトガルとの繋がりはなかったが、政府の他の部所や諸機関に働きかけて法要や顕彰活動を積極的にサポートした。次章で述べるように、東京で行われた準備会合は天羽の主催で行われた。

『日本精神』を翻訳し、法要に合わせて刊行した花野富蔵も徳島中学出身で、1 年生の時からモラエスの家にポルトガル語を習いに通っていた。『日本精神』翻訳後も次々とモラエスの著作を翻訳して『定本モラエス全集』[17]としてまとめた他、伝記『日本人モラエス』[18]を著した。

七回忌法要に関わった人物をみていくと、徳島中学出身者が多いことに気づく。2-3 でも登場した新居格は、天羽英二とは徳島中学の同級で、生涯の友であった。新居は読売新聞、東京朝日新聞の記者を経て作家となっていた。また、福良虎雄も徳島中学出身である。彼は在阪県人会長という肩書きで法要に参加したが、報知新聞社、大阪毎日新聞社、東京日日新聞社、大阪新聞社と新聞畑を渡り歩いた人物である。新居や福良が参加することになったのは、マスメディアを使った宣伝を期待したものだろう。

坂本章三は、徳島中学を卒業し、母校で教鞭をとった後、この時には光慶応図書館長を務めていた。モラエスが亡くなった際は、可能な限り遺品類を集めて図書館に引き取って収蔵した。七回忌の準備に当たっては次章で述べるように外務省の 1 回目の会議には、彼が上京して参加した。七回忌法要開催のために国の援助を要望した際に天羽に声をかけたのは彼だったかもしれない。

3. 法要の前の会合

前章で述べたように七回忌法要には様々な企図があった。湯本二郎が発案した時には、このような形になることは想像していなかったに違いない。政府の複数の部署や諸団体を巻き込むことができたのは天羽英二のおかげであり、それが分かるのは、法要の前に天羽が主催して外務省で行われた 2 回の打ち合わせの会合である。1935（昭和 10）年 5 月 11 日に坂本章三が上京して、1 回目の会合が開かれ、6 月 13 日に湯本二郎が上京して 2 回目の会合が開かれた。徳島日日新報の 6 月 22 日の記事に 2 回目の会合の内容が詳細に記されている。出席者は次の通りである。

△主催者　　外務省情報部長　　天羽英二
△日時　　昭和十年六月十二日午後零時半＝三時
△場所　　外務省第三會議室

△出席者　　外務省側駐葡國公使笠間杲男、同情報部長天羽英二、同第二課長田代重徳、同第二課喜多長雄、同文化事業部第二課長柳澤健、同第二課入江六郎、同亞米利加局第二課長田良治、同會田慶佐、文部省松尾成人教育課長代理南雲由松、鐵道省側國際観光局長田誠、同局事業部長高田寛、國際文化振興會理事青木節一、日本文化聯盟理事松本學、同石川通司、日葡協會金子武鷹、有志新居格、同花野富蔵

会議の出席者の多くが実際に法要に参加したことがわかる。また、この記事には、会議の出席者たちから出た法要に対する要望や意見が紹介されており、興味深いので載せておこう。

（一）　徳島の一般人士は餘りに『モラエス』を知らざるに付之を了知せしむる必要
（二）　本邦人をして「モラエス」を知らしむる爲其の著書邦譯出版
（三）　世界に日本を紹介する方法の一つとして『モラエス』の著書の英佛譯出版
（四）　南米等に普及する爲原文の儘廉價版出版
（五）　原文飜刻出版に際し或る著述には最近迄の日本紹介を適當の者をして記述追加せしむる案
（六）　右（二）、（三）、（四）、（五）の場合には何れも『モラエス』の原著の眞價を損せさる文章たること
（七）　『モラエス』の紹介は右の外随筆脚本傳記等に依り之を行ひ度きこと
（八）　『モラエス』は魂迄日本化せる點を留意すること
（九）　小泉八雲の例に依り財團を組織し『モラエス』の居宅の保存、遺品の保存等を爲し度きこと

モラエスを国内および国際的に知らしめ、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の他にもこのような日本讃美者が徳島にいたことをアピールすることが目的の一つであったことはすでに述べたが、（一）で指摘されているように、まず徳島の人にモラエスを知ってもらうことから始める必要があった。本稿の冒頭で述べたように、モラエスはなるべく目立たないように暮らし、彼がポルトガルで有名な作家であることは、徳島でもほとんど知られていなかった。著作がまったく邦訳されていなかったことから、一時新聞や雑誌でとりあげられても人々の関心はすぐに薄れてしまうのは仕方なかった。上記の提案を実行するために、会合の後すぐにモラエス翁顕彰会が組織された。6 月 21 日の徳島日日新報は会の発足を伝えており、記事に記された会則にはその活動内容は「講演会、座談会」「遺著、遺品、遺跡の整理保存」「遺著の翻刻」「パンフレット絵端書等の頒布」の事業を行うこととなっている。著作の翻訳については、『日本精神』が刊行され、その後続々と邦訳が出て、（二）で指摘されたことは実現された。また、（九）で示された旧宅や遺品の保存も

モラエス翁顕彰会が実行した。しかし、（三）で指摘されたポルトガル語圏以外での出版は実現しなかった。

さらに、この会合で以下のようなことが決まった。

一、右徳島に於ける七回忌に參列方現在迄に決定せる向は左の通り
在本邦『ポルトガル』公使『リペイロ・デ・メロ』閣下（六月三十日徳島着の豫定）
在神戸『ポルトガル』領事
外務省（出張者未確定）
笠間公使は目下の處確答致し兼ぬるも都合つかば列席され度き由
日本文化聯盟理事　松本學氏
東京外國語學校教授　星誠氏
新居格氏　　花野富蔵氏

二、徳島に於ける七回忌に對し式辭を寄せらるゝことに決定せる向
外務大臣　文部大臣
『ポルトガル』公使『リベイロ・デ・メロ』閣下
日葡協會

三、日本文化聯盟に於いては近く『モラエス』に關する文筆の士の手に成るものを大新聞に掲載

四、東京に於ける催しは徳島の七回忌終了後とし遺品展覧會をも開催

五、同日は大體右の程度の顔合せとし實行に付ては少數委員會を構成し取計らふことに打合した

【備考】
（一）拓務省よりも本件に關し外務省側へ打合せある模様あり
（二）前記の外『モラエス』を研究し又は深く心を寄せらるゝ向の中左の諸氏である
（イ）京都帝國大學文學部教授　新村　出
（ロ）大福火災保險株式會社神戸支店長郷土研究の特志家　川島　右次
（ハ）堺工業協會々頭、大和川染工所會長　柳原吉兵衛
（ニ）大阪外國語學校助教授　國澤　慶一
（三）大阪朝日新聞及大阪毎日新聞は『モラエス』存命中以來數回『モラエス』に關し記事を掲載しあり

（四）花野氏の翻譯せる『モラエス』の著書の中『日本精神』は七月一日頃第一書房より出版

備考（一）より 2-3 で述べた拓務省の参加については、拓務省から要望があったことがわかる。また、備考（三）において大阪の新聞界から来賓を招くことを暗に示唆しているが、徳島中学出身で、大阪の新聞界で要職をつとめ在阪県人会長についていた福良を招くことを想定しての発言だと思われる。

また、備考（二）（ロ）の川島右次にも触れておこう。七回忌の関係者の中で、唯一神戸時代のモラエスを知っている人物である。７月１日の徳島毎日新聞と徳島日日新報にそれぞれ「親日文豪モラエス翁を偲ぶ」「モラエス翁を偲びて」という追悼文を寄稿しており、モラエスとは神戸時代に公の席で顔を合わせることがたびたびあったと記している。また、モラエスの死後に、七回忌の計画が持ち上がる前にすでに『書物展望』という雑誌でモラエスを紹介している[19)]。

4. 七回忌の後

4-1. 観光への影響

モラエスを徳島人に知ってもらうこと、そしてモラエスを観光に活かすという徳島側の狙いはうまくいったのだろうか。七回忌の翌年に花野が旅行雑誌『旅』に書いた記事[20)]から引用してみよう。

> 「八雲の出雲」といふ言葉があるんだから、「モラエスの徳島」といってもいい筈だ。事實、モラエスはいま徳島の郷土名物にならうとしてゐるんだから文句はないと思ふ。徳島なんて、日本人だって知らない人もかなりある。あの四國の島の片隅の名前が、モラエスのおかげで世界に知られて來たんだから凄い、―といふのがお國自慢といふ奴かもしれぬが、この第二の小泉八雲たる葡萄牙の文人モラエスが書いた文學作品には、「徳島にて。モラエス」と、ちゃんと署名されてゐるし、おまけに「徳島の盆踊」といふ傑作まである。だから、Tokushimaは國際的なのだ。
>
> 今は亡きこの薄倖な葡萄牙文人の七回忌法要を、昨年七月一日の命日に、文字どほり全縣民の參加のもとに盛大に擧行した。最初のうちは、無知な縣民の中には何であんなに大袈裟な法要をするかしらと腑に落ちぬ者もないではなかったが、今でははっきり認識してきたやうだ。何よりも嬉しい極みである。この法要が契機となって、モラエスの再認識が行れ、徳島の名が日本ぢゅうに、否、世界ぢゅうに擴がった。モラエスの生地葡萄牙の首府リスボンでは、最も繁華な大道を「モラエス街」と改名して、徳島縣民の好意に答へるといふ美しい國際的交歓の場面すら現出した。法要以來、徳

島に於けるモラエスの遺跡を訪ふもの引きも切らず、まったくモラエスは徳島第一の名物になってしまったのだ。さうして、いよいよ「モラエス館」の建設と舊宅の保存とに三萬圓の豫算が組まれることになり、ために知事がこの六月上旬東京へ來きたほどだった。

いささか徳島を卑下している点や七回忌の成功を自画自賛している点が気になるが、モラエスの旧居を訪れる人が増え、徳島の名所になったことは事実であり、期待通りにはこんだと言える。また、花野はリスボンに「モラエス街」ができたことを記しているが、これも事実であり、"Rua Venceslau de Morais（モラエス通り）"は 1936（昭和 11）年 2 月 20 日に名付けられた [21]。ただし、「最も繁華な大道」は花野の勘違いで、正確にはリスボンきっての大通りであるリベルダーデ大通りの起点マルケス・デ・ポンバル広場にほど近い細い道である。

4-2. 日本主義への批判

これまでのモラエス研究において、モラエスの著作が文学界の日本主義との関係で論じられることはあったが [1, 3, 22]、本研究ではさらに踏み込んで、松本学の七回忌法要の参加や、花野富蔵が邦訳のタイトルを『日本精神』とした理由について指摘し、モラエス顕彰が日本主義に積極的にのっかったこと示した。松本と近い立場にいた佐藤春夫は、日本の賛美者としてだけでモラエスを評価すべきでないと主張したが、彼以外にもモラエス顕彰と日本主義との関係に疑念をもった人物がいた。

唯物論哲学者の戸坂潤は、日本主義活動の一環としてのモラエスの著書の翻訳について、1937（昭和 12）年に著した『世界の一環としての日本』[23]の中で批判を加えている。彼は、1934（昭和 9）～1936（昭和 12）年の日本の出版界を振り返って、政府の思想善導を狙った出版物の統制指導が見られるとして、その例を挙げているが、その中にモラエスの翻訳も含まれている。

翻訳権問題協議会の成立（三五年十二月）、日本ペンクラブの外交官まがいのジェスチュア、科学ペンクラブの成立、其の他、国定教科書の改正及び値下げの問題、中等学校教科書国定の問題。図書館「閲覧者大会」（三五年二月）・議院図書館設立問題・内務省納本による官吏のための図書館計画・上野図書館増築・二千六百年祝賀記念大図書館建設運動・等一連の図書館に対する関心。それから、高野長英蘭語遺稿の翻訳・清朝秘録の出版・モラエス遺著の翻訳・西源院本太平記の刊行・聖徳太子憲法のドイツ語翻訳・愚管抄の英語翻訳・大日本外交文書の編纂出版・『御堂関白記』の複本作製・『帝王学』の刊行・国体明徴用書冊編纂（文部省）・『帝室制度史』編纂着手・等々一連の国粋文化宣揚運動など、思想運動として検討すべき現象は少なくないのだ。（下線は筆者による）

また、戸坂は同書の中で松本学と彼が設立した文芸懇話会についても次のように批判する。

> 文芸懇話会の文芸統制の社会的役割が、文芸賞第一回授賞問題をめぐって、佐藤春夫によって暴露されたことは世間の記憶に新しいことである。又松本氏の本質に就いては、その邦人主義や第五インタの主張を見れば明らかである。

4-3. モラエス翁顕彰会のその後

モラエスの顕彰活動は、七回忌以降もモラエス翁顕彰会が継続して行った。活動の柱の一つである作品の翻訳については、法要に合わせて出版された『日本精神』の後にも、同年に『徳島の盆踊』（第一書房）、翌年に『日本夜話』（第一書房）と『おヨネとコハル』（昭森社）が刊行された。さらに 1941（昭和 16）年に『極東遊記』（中央公論社）、『日本歴史』（明治書房）、『大日本』（帝国教育出版部）の 3 冊が刊行された。これらはすべて花野により翻訳された。花野はまた、1939（昭和 14）年にモラエスの伝記『日本人モラエス』を著したが、その中で徳島でのモラエスについて、家に仏壇や神棚をもうけ、食べ物も日本のものを食べ、万事日本風に暮らした様を描き、外務省で開催された第二回会合で出された意見「『モラエス』は魂迄日本化せる點を留意すること」に応じた内容となっている。

次第に世の中が戦争へと向かい、開戦そして敗戦を経るあいだに顕彰活動は下火になった。モラエス文庫を中心にして記念館をつくる計画は、七回忌法要の準備画段階からあったが、長らく実現しなかった。その風向きが変わったのはモラエス生誕 100 年の時である。1955（昭和 30）年にモラエス翁顕彰会の主催により「モラエス生誕百年祭」が盛大に催されたが、その準備のために前年に会則が見直され、事業内容が「法要」「遺著の出版」「ポルトガルとの連絡」「モラエス記念館の建設」に変わった [24]。そしてさらに 11 年を経て、1976（昭和 51）年にようやく眉山山頂に「モラエス館」がオープンし、これをもってモラエス翁顕彰会は解散した。代わりに新たにモラエス会が設立され、顕彰活動と法要が続けられている。

註

1) 岡村多希子. 『モラエスの旅―ポルトガル文人外交官』.彩流社（2000）

2) 佐藤征弥・岡村多希子・境泉洋・石川榮作・宮崎隆義.「ポルトガルの大衆紙“CIVILIZAÇÃO”が 1930 年 1 月号で伝えたモラエスの墓、告別式、彼の部屋に関する記事について」.徳島大学地域科学研究 4 巻.68-79 頁（2014）

3) 岡村多希子.「戦前におけるモラエス顕彰」.東京外国語大学論集 42 号.183-200 頁（1991）

4) 佃實夫.『わがモラエス伝』.河出書房新社 (1966)

5) 湯本二郎.『ウエンセスラウ・デ・モラエス翁』.モラエス顕彰会（1935）

6) 徳島県立図書館. 『モラエス案内』(1955).

7) 佐藤征弥. 「モラエスを初期に国内外に紹介した会田慶佐」. 『平成 29 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書 異文化に照らし出された四国 ：外国語文献の調査・研究から』52-61 頁（2018）

8） 飯塚春夫.「我が國をブラジルに良く紹介し得るたゞ一人の葡國人 モラーエス氏と日本」.ブラジル 1 巻 7 号.33-37 頁（1927）. 本文中で述べたように会田慶佐が飯塚春夫の名前で書いた記事である。

9) 坂口満宏.「日本におけるブラジル国策移民事業の特質 ： 熊本県と北海道を事例に」.史林第 97 巻 1 号.133-170 頁（2014）

10) 日本交通公社のホームページ「旅の図書館」より「日本における観光行政のあゆみ ～国際観光局の 12 年～」.https://www.jtb.or.jp/gallery/board-of-tourist-industry2019/

11) “K.B.S. quarterly” Vo.1. No.2. Kokusai Bunka Shinkokai, pp26（1935）

12) 東京日日新聞1925（大正14）年3月9日に掲載された「知られざる日本の理解者」. これまで発表時期は未確定であったが本報告書の執筆者である河田により確定した。（河田和子.「貴司山治におけるモラエスの影響―日本の文学者におけるモラエス受容―」. 令和2年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書. 異文化に照らし出された四国～グローカルな視点からの地域文化に関する研究から～）.73-86頁.（2021）

13) 岡本良知.「ウェンセスラウ・デ・モラエス氏に就いて」.書誌 2 号. 31-32 頁（1925）. 同誌には、この記事に続いてモラエス著 “ Fernão Mendes Pinto no Japão” を岡本が翻訳した「メンデス・ピント雑考（一）」が掲載されている。

14) 海野福寿.「1930 年代の文芸統制―松本学と文芸懇話会―」.駿台史學 52 巻.1-38 頁（1981）

15) 越川求.「「日本精神」による思想・文化・教育の動員枠組みの確立―長野県「二・四事件」の時期における 内務省警保局の役割に焦点をあてて―」.立教大学教育学科研究年報 59 号. 59-74 頁（2016）

16) ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 花野富蔵訳.『日本精神』.第一書房（1935）

17) ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 『定本モラエス全集 I～V』. 集英社 (1969)

18) 花野富蔵.『日本人モラエス』. 日本文化協会（1939）

19) 川嶋右次.「ウエンセスラウ・デ・モラエス翁」.書物展望 3 巻 10 号（1933）

20) 花野富蔵.「第二の小泉八雲 モラエスの徳島」.日本旅行文化協会.『旅』.1936 年 9 月 1 日号.10-13 頁（1936）

21) リスボン市文化遺産局・地名センター（Câmara Municipal de Lisboa Departamento Património Cultural/Núcleo de Toponímia）が管理するホームページに2014年5月30日（モラエスの160回目の誕生日）に書かれた記事による。

https://toponimialisboa.wordpress.com/2014/05/30/rua-venceslau-de-morais-no-seu-160o-aniversario/

22) 孫若聖.「イデオロギーと詩学はいかに翻訳に影響を及ボすか―『日本精神』訳文の語彙を中心に」.通訳翻訳研究12号.275-289頁（2012）

23) 戸坂潤. 『世界の一環としての日本』. 白揚社（1937）

24) 徳島県立文書館に収蔵されている資料を参照した（資料番号 K201000174「昭和 29 年度一般文化 1」）